アラン
心の冒険
(上)

高村 昌憲 訳

第一章　表題の説明

私は、最初の印象及び次のように言わせる自己についての最初の判断の結果で、大部分の人々にやって来るものを、心の冒険によって理解します。「私は愛する、私は愛さない、私は愛することが出来る、私は憎む、私は軽蔑する、私は評価する、私はこれを憎む、私はあれを嫌う」及びこの種のことです。というのも、これらの最初の観点は気分的なものでしかない時に、自己放棄したり顔を背けるのを強く望むのに応じて、直ぐに必然的な結果に従って発展させられるからです。この企ては私たちの情動を情熱に変えます。そして時々は情操に変えて、私たち自身で予測出来たことから常に大変遠くへ連れて行きます。そして最も広がった意味をその言葉に与えながら、私たちの全ての慣習と、私たちの信仰と呼ぶのが許されているものを変えます。かくして激しい快楽の経験は、人間を取るに足りないと自ら思う人生に巻き込みます。そんなことはないのに獰猛になります。それと同じ土台から出発して、まさに神を信じるか否かを知る前に、修道院まで行き着く自己を見出します。他にも手段は沢山あります。結婚もその一つです。しかし結婚には千通りとかそれ以上のものがあります。でも、冒険の無いものは一つもありません。最も鈍い精神は、吝嗇家が博愛家になったり、あるいは絶望者が近代絵画に興味を持つ様になり、少しも期待しなかったことを何時も発見していると私は言いたいのです。これらの事例の多様性は、愛の術策にとって十分な観念を未だ少しも与えていません。その多様性が少なくとも知らせているのは、私が綿密にその言葉の使用に私を適合させながら、この主題の全ての広がりの中でこの主題を私が踏破するのを強く主張することです。「彼は神を愛する、彼は香水を愛さない、彼は美を愛する、彼は古い家具を愛する、彼は真理を愛する、等々です」。色々な憎悪を斟酌しないこととは、数々の愛の裏側のことですが、これらの概念は全てが不確定の儘です。私は一枚も絵を望みませんし、一つの制度も望みません。私は、沢山の観察が支離滅裂で、それらが三重の鎧を着けた人間の心に、あらゆる側面から攻撃する時も沢山の観察によって開始したいと思います。決して男性とか若者とか老人とかのものではなく、女性のものでもなく、それは夢想や、好きな思い出や、天使とか悪魔への崇拝の様な何ものかを眼で見守ることはありません。それは全て、あるいは殆どが歌われていました。しかし、それでは誰がはっきりと見るのでしょうか。けれどもそれは全ての人々が望んでいることなのです。（完）

第二章　第一の困難、真実について

私が大変自然に導かれたばかりのこの観念は人がそのことを思考するや否や、極めて遠くへ広がります。それは全ての人々にも広がります。というのも愛情という真実を求めないのは人間ではないからです。神について間違えないと良く理解されています。愛されている人物、美、古い賞牌についても間違えないと良く理解されています。更に、真実の愛情はそれが常に追い求める真実によって、そして決して挫くことの無い一種の注意力によって分かる様に私には見えます。その意味で愛情には虚栄心というものが全くありません。その代わりに単純な慣習には多くの虚栄心があります。その意味において全ての人々は、、事物そのものを超えて真実を愛します。そして、もしも言えるものなら、事物そのものを超えて愛されている事物の真実をまさに愛します。しかしながら、もしも急ぐことなく反対に何人の人々が真剣になっているのか、そして真剣に理解されるに値しているかを考えるなら、微妙なことを全て十分に説明するのが可能です。以上は、人々が真実を愛することを私が如何に理解することが出来たかです。何故なら、吝嗇家がお金やダイヤモンド、あるいは事業を行う国の法律についての真実を愛しているのを、私は知っているからです。そしてアルセスト（1）はセリメーヌの真実を望みますが、見付からないで苛立ちます。暴君は暴君の真実を絶えず追い求めます。つまりそのことが彼自身のことであっても、彼らしく見えているものではないのです。それは物理学者が物理学の真実を愛するのと同じ意味です。それはまるで恰も彼が自分自身の力と栄光を愛していると言われていたかの如くです。それに反して夥しい数の真実に関心がある人は少しもおりません。実った小麦の畑に小麦の種子が幾つあるのかを知ろうとする人は誰もおりませんし、イル・ド・フランス地方にシジュウカラ科の鳥が何羽いるのかを知ろうとする人も誰もおりません。古代エジプトの王アメノフィスが何人の妻を持っていたかを知る問題も、彼が栄誉とか利益とか制度を生んだ者であるということしか関心がないからです。一種の抽象的対象の実際の合計を出すことが、私はそれ故に好きではありません。人は全ての当事者が等しく好きなのです。換言するなら、大変良く持ち出しますが、嘘を憎むことは私たちの愛情に関係している真実しか決して見ないからであると私は言います。そして、それ故に例えば良心的な人間でも自分自身の名誉については、その様なことは関係ないのに躊躇うことなく嘘を付くのが分かります。人間は殆ど全ての真実を軽く見て、そうでないものについては完全に用心するかも知れません。こう言って良ければ本当の恋をしている男性は、全ての女性を愛するまで、彼女たちの間に発見する絆によって引っ張られて行くことも十分にあり得ます。そして同じことは、最も正しい心の冒険を明らかにします。従って、例えば恋愛において全ての疑いを確認する者は、簡単に言えば、存在の全てから普遍的真実まで関心があるかも知れないので、それは取るに足りない真実を知ることではないということです。そして、それは大変に不幸な別の心の冒険についての展望が開くことになります。いずれにせよ彼における真実の愛は、新しく考察されるまでは単純な言葉遊びのように私には思えます。オーギュスト・コントは、この愛が自然に大変弱く、他の愛情によって大抵の場合は打ち破られる運命にあると主張

しました。私は、出来る限り人間には一つの心しかないという原則に従って、逆の愛情を仮定した中でこの賭けを避ける決心をします。従って、例えば何かを愛する人間は真実を少しも気にかけないと私は決して言いません。彼は、将軍が実際の潮とか浅瀬のことを気にかけるように、常に真実を気にかけます。従って或る意味で真実の愛は、如何なる愛でも構いませんが、髄なのです。恋する人々の嫉妬は良心的な探求者においては、愛する対象と関係している真実に主として少しも依存していないことを私の精神に齎します。その中で彼らが理解することは僅かです。愛する対象は、二時間や四時間で行ったこととは何の関係もありません。しかし別の意味で賭けは彼の人生の全てです。何故なら少なくとも愛する対象の人の人生は、当時も続けられていると考えたいからです。そして暴君が、どんな衛兵も彼にとって本当に忠実であるかどうかを知りたがらない、とあなたは信じるでしょうか。その代わりに衛兵自身は、そんなことに関心がありません。壁とか門を造る様に、それは衛兵にとっての仕事なのです。（完）

（１）アルセストは、モリエール（一六二二～七三）の戯曲『人間嫌い』（一六六六）の主人公で、色々な男を誑かす奔放で若くて美しい未亡人のセリメーヌに恋する。

第三章　他の困難、美について

私は、美への愛が俗悪な愛から別れた一種の高尚な愛であると容易には信じません。人間は美しい物を見ると大変に幸せです。それを思い出すこともなく大変容易に見ていたと私には思われます。そうして平凡な物の中にあっても注意しないと思われます。美への愛は、美とは別の物への愛であり、屢々他の愛に美が目覚めることであると私は信じます。しかし、それはまるで神の愛が自然の光景に再燃しているとか、あるいは最も平凡な愛が名作への熟考によって立ち直っているかの如くです。そして時々は許している二つの愛とか、絶対に矛盾する二つの愛がその人物の中には決してないのを理解出来るのは、この種の事例においてです。一人の人物とか神へ赴くのと同じ愛が、本当のところ美へ赴くのもまさにそこからです。そしてそこから美に対する殆ど全ての人々の深い無関心を人は理解するに至りますが、それは出会いとか好機によって美しい対象を本心から愛するのを妨げるものではありません。これらの感情は、多くの曖昧な対象を狙うように強く主張する沢山の人々よりもまさにより確かです。彼は、有名な作品を前にして幸福な状態が分かるには、何時も容易でない経験をしていると私には思えます。スタンダールが言っている様に、大天使のラファエルに好かれない日々もあるのです。人が美を愛する時には、その様な美しい作品を理解して下さい。それは愛というものがその時、何らかの酔心地にさせる進歩が可能になると私は念のため信じます。しかしこの美しい瞬間に愛される真実は、そのために美しい対象よりも寧ろ愛されている女性であるとは私は言いません。というのも私はそのことを何も知らないからです。寧ろ決して分けられないように私には思えます。同様に食べたり飲んだりする楽しみも、テーブルの美しい配置と、周りを囲む友人たちの稀な集まりを感嘆して見る楽しみとに、分けられません。最も高次の愛の一つであると同時に、最も低次の楽しみの一つであることを表しているのが、キリストの最後の晩餐です。それは二つとも全てを獲得しているというのが私の考えです。画商とまさに商人でしかない者が、バルザックのエリアス魔術師（1）のように、一種の作品集のための情熱を身に付けているのは一般的であるこの主題に、私は注目しています。この事例は他のものでも明らかです。あらゆる人々において、都合の悪い分離や矛盾さえも限りなく発展の機会を与えていますが、美への愛から利得の愛を分離することは不可能です。恐らく、愛情に関しての間違った分析があり、ヘラクレスは多分悪徳と美徳に決して躊躇することがありません。どんな人間も、自分の荷物を全て持って向う岸に渡ります。そしてエリャ・マグスの吝嗇が本物の絵画と偽物を持っている、という奥深い認識と関係ないと言えるのは誰でしょうか。どんな情熱も驚嘆すべき計算を行います。そして私は、何人かのモラリストにおいては真実のものがあるというのを疑います。そこからデカルトは、全ての情熱にとって正しい使用があり、情熱が無ければ偉大な行動も思想も全く無いと言っています。確かに、美しいのは情熱そのものだけではなく、「椅子に座る聖母マリア」も又同様に美しいのです。多分、美しいのは二つの出会いです。それは二つのものを変えます。そして私は、芸術作品が僅かな瞬間に少なくとも魂の救いを生むものであると仮定するのが好きです。自分にとって大きな脅威である大きな情

熱の無い者は〈芸術〉をやるしかない、と私は更に言うまでになるでしょう。もしも私には、乗り越える後悔とか大きな苦しみが少しも無ければ、音楽は私に何を生むのでしょうか。その上、苦しみも後悔も無いのは誰でしょうか。如何に人間と大聖堂が通りの曲がり角でお互いに接触するのかを、私はその側面から一番良く見ています。この箱の中に全てを入れるために、高度な美の感情が他の感情に全然ないことを私は垣間見ますが、寧ろどのみち感情そのものは美しい対象によって高められます。その対象は従って本来話をするのを崇拝する対象であり、そして美しい迷信の隠匿者でさえありますが、その迷信を助けてもいるのです。美はその昔、迷信でもありました。つまり奇跡の中心であったと一般的に言われていました。何時もそうであると私は理解しています。私は結論を下すのが早過ぎました。しかし、この結論は私が従って行きたい新しい道の観念を与えています。新しいというのは、小道の様に人間の足で何千歩も歩き回ったものであると理解して下さい。（完）

（１）エリアス魔術師は、小説『従兄ポンス』の登場人物である。

第四章　他の困難、善について

人生の最高の目的として絶対的な〈美〉や、絶対的な〈真実〉と同じ様に〈善〉の理想を愛することが私に提案される時、私は自分自身の裡を探求することはありません。少なくとも愛の輝きを大変に分かり易く理解することであると敢えて言いますが、それは〈神〉への愛と命名されているものです。それでもやはり〈神〉が私に齎すことの出来る愛とか、神の自由とか、神の正義とか、神の優しさについて私は考えることが出来ます。私が言葉を生むこれらの蒼白い冴えない全ての存在は、確かに尊敬すべきであると私には思われますし、そのことしか熟視しないで出来る限り解決される人生を、私は最高のものと判断する気になっています。しかしながら私はこの貧弱な宗教に顔を背けます。イエスの足に接吻する人々は、スペイン人たちが行っていると言われていますが、より一層良い道が約束されているように私には見えます。何故なら一つの観念を模倣しないで彼らは、受難や彼ら自身と同じに死に従った人間の姿を模倣するからです。私は戦争の残酷さを言うためにも、この隠喩的な表現を生き生きと感じていると敢えて言います。「イエスは受難の息を沢山つく」。それが言いたいのは、人間は人間によって苦しそうに息をつくことです。人間は息をつかないことが出来ません。従って、もしも人間たちが少しも最良でなかったなら、彼自身が正確に最良でなかったなら、決してそんなことを望みません。そして次のとおりの強い言い方があります。「私が偶然にしか逃れられない限り、逃れることは望みません」。これは明らかに十字架の苦難を増やします。そうして十字架に架けられた人間に意味を与えることになります。更に、身近な宗教を把握するのを私は決して急ぎません。私は多くのものをまさに何時も私に近付く儘にさせて置くのであり、決して到達させることはありません。それは私が宗教の対象としての美徳を全く少しも信じないことなのです。その美徳によって人間が内面の活動を救済することがなければ、救われないでしょう。そして、如何なる宗教も人間の中で起こります。自分が持っている感情の内面的変化によるのであって、自分が持つことのなかった感情の獲得によるのではないのです。実際に修道院へ行く者は、彼が持っている或る感情をやり遂げたいのであり、絶望から向かうのではありません。その変化は彼が時代から逃避したり、全ての死者たちに基づいて悦に入る時、本当の詩人の中に生まれるものと大いに似ているかもしれません。この類似は、全ての詩に関して私に宗教的な調べを述べることになるでしょうが、同様に私はホラティウス（1）からピユラ（2）までのように、何でもない最も些細なことを言っているのです。そして聖書は第一に、慰める術も無いものとの出会いによって慰めになる巨大な詩です。しかし、それは読者が最初に感じて継続して行くことです。その上で、盲目的信仰は救済された瞬間の情熱です。それは天使が蘇る前の剣の一撃です。そして神の厳格さは人々の祈りになります。宗教的悲劇が演じられるのは全てが大地から出ている水蒸気の中や、お供えの煙の中であることに、私は大いに強く感じることに拘ります。天国には不在しかありませんが、それも又大変なことです。

私は換言してもう一度言いたいのですが、善とは私たちの愛情による善のことです。何故なら

私たちはそれらの愛情に導かれなければならないからです。そして、この義務は自分たちの魂のように愛情の中にあります。例えば自由を気にしなかったり、愛される対象の大きさを気にしないで愛するのは、どれ程禁じられていても不可能ではありません。でも、それによって高められなかったなら、その時はまさにより一層低く降下しなければなりません。善は愛情による救済であり、その救済は私たちが愛情そのものの細心さによってやり遂げるものです。その点で善は、人々が言っていたように絶対的な義務であるということです。でも、自分自身の人格と結び付くものとしても理解することが出来ます。人間の善は自分そのものであり、自分から引き離すことは困難であるとアリストテレスは言いました。さて今度はアリストテレスを真似て私が言いますが、幾何学者の善は幾何学者であることにあり、自らより一層良く幾何学者になることです。そして、吝嗇の善は自ら吝嗇になることであり、野心家の善は自ら野心家になることです。私はマルクス・アウレリウスの言葉も好きです。それは友人のシャルル・ナバルの翻訳が適切で、私には忘れられません。「その中を穿つのだ。善の泉があるその中だ。穿つ度毎に、それはその度に湧き出るのだ」。そうです、人は自己から地球上のものや地下のものを救いたいと思い、そして分割しないでそれらの方へ赴き、反対に船のように自分の小箱と共にしか逃れないと誓いたいと覆う度毎に、それが勇気のある瞬間となる度毎に、それと同じ忠実さから救いがやって来ます。そして私としては、財宝と共に溺れる方を愛している吝嗇家を救済します。というのも他の伝説では、彼を裸で助けるのを反対に要求しており、私たち自身やお金のためであり、それは労働のためである人生から引き離す傾向があるからです。これらの命題は繰り返されるに違いないことを私は良く理解しています。同様に暴君も救済しなければならないのを私は良く理解しています。その上、私は決して神ではないし、神の使いでもありません。しかし私はついに神そのものに嫌悪を感じるようになりましたが、この感激は障害物と勇気によって、殆ど崇高な人間の愛の様なものです。別な風に話せば、もしも自然な感情としての曲線を延長したなら、人は一人ひとりにとっての善が過剰になると、そこから逃げ出すことを私は信じますし知ってもいます。この崇高な人は詩に執着します。何故なら、何も分割された儘でいないからです。そして詩の様に内面の様子を多く持っています。かくして私は人間の華麗さを喜びます。そして両眼を閉じた乞食詩人は、人間としての極端さを賞讃している様に私には見えます。この確信が善です。あるいはもっと適切に言うなら、初期の簡単な検討における善には一瞬の崇高さがあります。そして、この崇高さは僅かなものであって、直ぐにも何ものかによって再び倒れます。この落下や再落下は、そこに注がれる高い処からの光と共に伝説の中に移りました。これらの優雅さと不具は、『イリアッド』が読み返されるように、常に繰り返されると考えれば十分です。

　簡単であればある程、学派の論争に近くなります。私は道徳に適った感情は決して無いと言いたいのです。つまりそれは数々の善にとって何らかの最高の善を対象としていますが、寧ろ全ての感情はそれらの感情が高められた段階と比較しても道徳的であり、そしてそのように述べなければなりません。情熱という言葉はここを強く知らせます。というのも、その言葉は奴隷と不幸を指し示しているからです。情や情動や欲望は既にそれ以下であり、幼年時代の純真さに近く、

それは何時も何かにつけて私たちの出発する処になります。つまり優しく愛することから悲劇的に愛する方へ人は移り、そして〈善〉はその向こう側にあるということです。でも個人の愛と同様に、お金持ちの愛にも真実はあります。結局のところ虚栄心も同じであり、それは望んでもいないが遙か遠くへ何時も広がって行きます。それを否認しなければ救済の道にもなります。勿論、寧ろ十分に肯定しているからです。かくして恐らく懐疑論者は、そのことを読み取って、あなたを絶望させることが嬉しいのです。あなたは偶像が倒れるのを見るのが単に怖いだけなのに、懐疑論者は全てが無駄であると実際に判断していたのです。ところが数々の偶像は、その下にも上にもあるに違いないのです。それらと同じ水準に人は止まることが出来ません。そこには多くの謎があります。しかしながら私は、人がそのことを考えるのを祈っています。（完）

（１）ホラティウス（前六五～前八）は、古代ローマの詩人。
（２）ピュラは、ギリシア神話でエペメテウスとパンドラの娘で、夫デウカリオンと共に大洪水後の人間の祖となった。

第五章　余りに便利な幾つかの分割

恋人と野心家と吝嗇家が、三種類の人間を生んでいます。全生涯に亘って恋人である男性たちがおります。それが応えているのは生理学であり、喜びと欲望の秩序であり、企ての一分野であり、魔法や夢想と同種類のものであり、命令と服従の移り気であり、孤独を求める人に驚嘆する羨望です。結局のところフィレモンとバウキス（1）の様な善き老人なのです。従って苦しみ、悲劇、憎悪する愛への素早い変化、後悔、幾つもの非難に基づく自己への非難、時々ある不幸の絶頂でもあります。しかしながら、それも又修道院のように愛する一つの方法なのです。ヴィーナスに従って歩く人々は、それらの冒険に決して終わりを見ませんし、何かの名前を言いながら亡くなります。

野心家である人々は別な風に行いますし、別な風に生まれました。彼らには別の力があります。所謂気分が非常に良いと、彼らが身に付けるのは優しさや信頼よりも激しさです。「彼らは、私を恐れさえすれば、私を憎むのだ」。これはまさに野心家の言葉です。野心には屢々軽蔑があります。それは少人数で権力を求める方へ逸れて行きます。野心家たちは群衆を求める方へ常にやって来ますが、それはまるで並外れた大きな権力が個人の弱さや無知や軽さを忘れさせたかの如くです。大胆さは若き野心家のやり口です。しかし歳を取ったなら、大胆さは最早基礎を築くことを心配します。それは秩序と法務官を設けて、決して分離させずに、それらの方へ赴きます。大胆さは術策と沈黙によって歳を取ります。しかしながら野心家は、支配への羨望を激しく持つにしろ、驚かせるために行うのであり、極端な老人になるまで激しいとはいえ、野心の報酬とは友情かも知れないのです。

吝嗇は、何かお金を使う必要があるのが共通しているこれら二人の人間と反対にある様に見えます。吝嗇の生理学はあらゆる年齢に広く広がった活動です。時期よりも早い知恵を持っていて、殆どがはやなりの老化と言われています。吝嗇の全ては肉体から決して離れることが無い振舞いの中と自己に還元する活動の中にあります。恐いのは吝嗇の精神です。貯えや富には用心します。整頓は点検するための一つの方法です。そして消費への心配は恐らく、そこでは泥棒への心配よりももっと当然なことなのです。吝嗇家は大騒ぎと変化が嫌いです。疲労することが嫌いであり、そして実際は興味を持つことも嫌いです。彼は愛することも嫌いである、と私は推測します。従って僅かなものしか上げません。それに反して彼は多くのものを引き出すのを期待しませんけれども、吝嗇家が好きなのです。バルザックはカフェ「ミネルヴァ」（『使用人たち』）にて吝嗇家たちの社会を表しました。彼らの活動も叫び声も期待されません。声は息であり、笑い声は顔の皺から出て来る一種の煙のようなものなのです。

三種類に分けたこの人物は演劇や小説、そしてそれらの会話の中で目につきます。私はそれを上手く利用したいと思います。しかし、これらの三種類の情熱が同一人物でも三つの年齢に対応していることに注目して、先ずは解体したいとも思います。それは私たちの民族や性格に用心することでもあります。大変自然に自分たち自身の序文筆者や喜劇役者たちになる両極端が、もし

も無視されるなら、どんな愛でも野心の中で廃れますし、子供たちが案内するのはそこであるのは分かっています。というのも子供たちに関してのその案内が、もしも彼らにとっての野心があるとすれば、最初に自分から野心があるものになっているからです。事実は彼らのためには子供たちを教育する前に、自己を規制しなければならないのです。そのことは野心の意味合いを示しています。その上、職業や結婚の準備をする思いは、父親の愛が何時も最も高貴な野心であるのを斟酌しなければ、愛の輪郭よりも寧ろ権力の輪郭を辿るように導きます。父親と同じく人は祖父になり、かくして野心は吝嗇の花を咲かせます。そして屢々高潔な吝嗇になりますが、高潔であって浪費ではないのです。これらの変化は年齢の変化に対応します。何故なら最も自然な変化は、怒りの発作に示されますが、その怒りは無くならないとしても次第に鎮まって行くからです。かくして同一人物が別の人種に移って行きます。そして、この指摘はその人種を観察の道具に変えます。その様なものが観念の正しい使い方です。

しかしもっと適切に言うなら、もしもそれらの観念は、私が昔から君主制や民主主義や専制君主制やその他の種類のもので、それらがどんな国家にも統一されているが、多少なりとも場所と期間と歴史に従って眼に見えることに気付いていた様に、あらゆる年齢のあらゆる生活を明らかにするとするなら、愛には常に野心があると私は同じ様に言いたいのです。何故なら愛は力を望むからです。そして愛の中には吝嗇もあります。というのも、愛は常に変化と大騒ぎを恐れるからです。同様に、野心の中にも愛がありますが、屢々そんなにも望んだりしません。何故なら信用することは屈辱的であるからです。しかし何時も人は脅迫することが出来ません。何故なら眠らなければならないからです。眠ることは愛の勝利です。そして野心における吝嗇も、少なくとも愛の種類によっては節約と蓄積の方法になります。吝嗇に関しては、それ自体でもっと確実な野心を閉じ込めています。というのも人間よりも事物による方が、より良く人間を支えているからです。野心家たちは、お金があらゆる事業を支援して、或る意味では率直な意見に協力することを知っています。吝嗇の中で愛を求める時も、征服的な吝嗇とか、強欲的な吝嗇とか、無欲な吝嗇とか、考えられなかった様な幾つもの種類の吝嗇が見出されるのも本当です。全ての他の情熱と共に吝嗇のこの混合についての考察は、嫉妬深い人、全てを経験した有名な人物、奥深さを持っている人物、そして一種の申し分のない完全な人でそれを武器にしている人を少しは明らかにしています。恐らく嫉妬深い人は、彼が人の中に見分ける野心や愛によって希望している幸せを、奪われるのを第一には恐れませんし、主要なことでもないのです。寧ろ彼は予想されなかった動きに傷付けられます。自分自身の何ものかを発見したり委ねるのを強制されるのは明白です。彼は大変熱心に一種の浪費を勧められます。吝嗇家は自分の秘密や野心にさえも愛着を持っています。人は時々、何も嫉まないことに嫉妬するものです。妬み深い人は、彼が嫉む財産とは関係がありません。嫉妬とは、彼が持つ財産への嫉妬です。彼はそのことを知るために独りでいたいのです。そのことを理解する術を知らない人々が、特に恐いのです。絵画の愛好者は、彼独りが好きと分かる傑作を、決して大衆に委ねたくないという意味において嫉妬深いのです。しかし彼は多分、傑作の周辺には如何なる冒険も軽率さも決して望みません。例えば、もしも人が

殆ど見なかったり他の作品のことを話したりすると、彼は嫉妬します。嫉妬心を掻き立てるものは恐らく世界中で観察されるのと同じ軽薄さです。それは実際に全ての上で揺れていて、全てのことを笑います。その様なものは多分、全ての情熱にとっての敵であり、その無邪気さによっては更に最悪の敵です。これらの考察は、もしも人がその人間を驚かせたいとしても、策を弄して待ち伏せしなければならない観念の中で、私の気持ちを堅固にしてくれるのです。（完）

（1）フィレモンとバウキスは、ギリシア神話で旅路のゼウスとヘルメスをこの二人だけが歓待し、その報いを受けて長寿を全うした。仲睦まじい夫婦の象徴である。

第六章　軽薄さ

軽薄さは、私たちの殆ど全ての感情の前にある軽そうなカーテンの様に掛けられていますが、多分情熱の前では滅多に無いのですが、若々しい情動の前には常にあります。そして恐らく最終的な場合にその軽薄さは、不動の後の震えの様に反対の動きにしかならず、それから休止します。笑いはそれ自身が大変に大きなしるしであり、時々は無意志のものですが、その時も屢々故意の様なものです。軽薄さは、笑いの様な痙攣ではありません。それは軽快でつま先立ちしているのです。忘却そのものであり、第二の誕生です。前例を消去するダンスの第一歩に似ていますが、如何なる規範もありません。それ故に人々は時々断言している様に見えますが、軽薄さは情熱であり、情操と同じであると私は言いません。勿論、私が信じていることは夢中にさせる様に、軽薄さは快活な動きによって手に入れた情熱を意識的に変えます。それは全く礼儀正しさではありません。礼儀正しさは、注意して全ての変化を遠くから備えます。軽薄さは注意力を砕きます。それは退屈したり、他に探したりすることの目印ではありません。「あなたは不機嫌ですが、それでは舞踏会にいる資格がありません」とラ・モール侯爵夫人が言いました。するとマチルドは直ぐに皆が踊っている様に踊ります。

ダンスの動きには注意力が要求されます。知覚を変えますし、相手も変わります。それは奥深い智恵の様なものです。「お待ちなさい。未だ相手を選んではいけません。あなたは舞踏会にいるのです。考えるのは明日ですよ」。舞踏会の暗黙の約束は、相手を選り好みしてはいけないのを人々は知っています。しかしながら幸せへの好奇心も無く、踊りに酔うこと、そしてどんな季節でも喜びに有頂天になるのを理解することは出来ません。そして情動の勢いから人は、敢えて試みに言うことさえあります。情動は余りに強いと予想されました。情動は全てが全く強いのです。そして、思いがけない驚きは快いものでさえあり、気まぐれな気分を生み出します。幼い子供は、初めて会う新顔の人から侮辱されているのではないことを学ばなければなりません。しかしながら、それが何でしょうか。精々、舞踏会では当然に毛嫌いする人や共感を覚える人を感じることが出来ますし、意識することも出来るでしょう。しかし、それは決して許されません。激しい動きの中で誕生した全ての感情を、粉々にしなければなりません。最後の言葉は言い過ぎです。それは軽快さの楽しみも涸渇させなければならないことであり、裏切りと同じ気持ちのことを言っていることになります。自分を不幸に投げ入れる様な生真面目さや誠実さには抵抗しなければなりません。従って軽薄さは、礼儀正しさと同時に教育されます。礼儀正しさには、多様性と動きが無いと危険です。そのことを微笑によって知らせなければなりません。

軽薄さには、正確に言えば喜劇の意味はありません。喜劇は情熱を解体しますし、情操も解体します。軽薄さは情熱や情操が生まれるとそれらの隙を窺い、その渦巻の中で溶解させます。締め付けるのを拒絶します。行為の中で解きます。それ以上に臆病に感動するものは何もありません。しかし、もしも臆病になったならば、その時は臆病が不幸を治します。人間嫌いの人々は孤独の中で維持することを求めます。この非社交性は嫉妬深い者の顔付きの一つです。恐らく情

操は、真面目さの圧制の中では生まれることも発展することも出来ないと考えなければなりません。理由を言うことになれば、沢山の章を書く仕事になります。恐らくそこで、自由に戻るためには自分を頼みにしなければなりません。女性たちを閉じ込めているのは、非社交的な未開の風習です。多くの精神生活を再び降下させます。ところで何時の世にも、これらの眼に見えない監獄があります。牢番は少しも嬉しくないことを知らなければなりません。しかし人はもっと遠くを見ることが出来ます。その時は最早、崇高な愛へ移行することはありません。この予感に倣うなら、軽薄さが再びそれらの頂で微笑しています。正しく歌を歌い澄んだ装飾音がそれと同じものを表すのは、偉大な軽薄さであることを考えに入れて下さい。スタンダールは、ドイツ人の真面目さよりもオペラ・ブッファ（1）の方に感動していました。まさに敵意に満ちた情熱は、人が愛しているか否かが最早分からない状態であると私は推測します。その状態は決断の時の熱狂であり、悪魔の誓いです。それは大変有名で、屢々懐疑によって知る術を覚える規律になります。そして人類が良く思考する様な話に私は感嘆しますが、それは天文学には無いのです。何故なら人類は天文学を嘲笑するからです。しかし人類の大切な愛情という問題については、それを決断するためにまさに少しも身を引くことがありません。楽しさはそれ故に私たちの愛情を明らかにします。楽しさが無ければ違いが失われて、そして全てが暗く陰気になります。（完）

（1）オペラ・ブッファは、十八世紀中頃から十九世紀中頃までに創られたイタリア・オペラの一様式である。それまでのオペラ・セリアは貴族などの娯楽のために創られたが、オペラ・ブッファは身近な題材で平民のために創られていて、基本的には喜劇である。

第七章　演 劇

アリストテレスは、恐怖と哀れみを掻き立てながら、悲劇はこれらの情熱を同時に純化したと良く言いました。少なくとも言うべきことはもっとあります。というのも観客たちが自分の恐怖や哀れみに執着し推し測ることからしても、彼らは執着しないでその時は登場人物たちの全ての情熱を〈模倣する〉からです。例えば、愛、野心、嫉妬、要望、憎悪であり、その様にそれらを感じることを学ぶのです。それは観客たちが軽薄さをあらゆる手段で学んでいるということです。それ無くして情熱は殆ど発展しません。それらは激怒であり、狂気であり、高ぶりの絶頂であって、覚悟が無ければ忘れて仕舞うでしょう。現在行っている学習においても、感情や恨みよりも行為は重要でなく、二番目の言葉が一番目の言葉を説明することしか行いません。それは私が自分自身に繰り返して言うこと、我慢すること、そして妥協する術を知らないことですが、私はそれを決して感じませんし意識しません。ところで演劇では第一に行為を全く無しで済ませます。純粋演劇が可能である限り、私はこの様に叙述します。どんな行為も演劇では言葉から成っていると言えます。それらの言葉は、その次には記憶に留められて非難されます。そして自己への言葉は、重要でないものはありません。以上のことから独白は演劇では大変に自然であり、各人の人生においては大変な逃亡者です。従って演じるのを学ぶかどうかは、些細なことではありません。しかし何を演じるのでしょうか。

役者が劇中の人物でないことは良く分かっています。観客は、両眼を凝らして見る様に、ネロ自身を見ている様な錯覚を自らに与えます。そして、その時は演技に感嘆しながら二番目の人に立ち去ります。役者としてはその様な二人の栄光を刈り取りながら、現れたり消えたりすること無しでは済まされません。しかし結局のところ彼は演じているのです。つまり彼は、意識的なしるしと活動と身振りと言葉を生んでいるのです。彼がそれらに刷り込んでいる一種の飛躍によって、短時間で無意識に戻るのを知っているのであり、それが停止すれば直ぐに不安にさせられます。何らかの中で不変と沈黙という二つが結び付いた運行は、決して同時に運ぶことがありませんし、それらを区別しなければなりません。そして各々のものは、震えとかすすり泣きとか、顔が赤くなったり青くなったりする様に、無意識なしるしとしての振動を与えます。これらの試みは模倣されて増大されます。しかし入ったり出たりして応答するのが非常に規則正しい時間は、既に詩によってもっと正確になりますが、それにつれて血の気の多い活動を消して私たちからドラマ的なものを剥ぎ取ります。そして役者の上にそれを再び投げ込みますが、その時役者は競技者の様にそれを容易に身に付けます。大変に現実的なこの力は崇高さを大変良く表します。登場人物は打ちひしがれて、実際に話すことも歩くことも出来ません。現実の全てのドラマは病人でも死者でもない時に、極端な疲労の中で訳が分からなくなります。その代わりに死なないことが役者の技術になります。あるいは死んでいない様にして死ぬのが役者の技術です。応急手当として私たちは、私たちが体験していることの表象をしるしに与えることになります。あらゆる情操には確かに技術がありますが、あらゆる情熱にもあります。何故なら、情熱は人がそこに戻る

か戻らないかでしか、情熱にならないからです。別な風に言えば、どんな悲劇も自分自身が分からない罪の中で迷っているのです。

〈喜劇〉は〈悲劇〉を超えています。しかしそれ以前の考察に従えば、喜劇は悲劇そのものにもあります。それは少しは掻き立てられたり抑制されたりしたドラマに保持されているものであることを認めましょう。悲劇という芸術は滑稽さを避けるものでもあります。それ故に同一の悲劇俳優が、優れた悲劇俳優に成り、彼が望めば優れた喜劇俳優にも成るでしょう。喜劇への愛が立派にそれを証明しています。何故なら、そのことからあらゆる悲劇をそれ以上に遠ざけますが、それでもなお感動させるからです。喜劇への愛は、それ以上に感動させると誰もが言うでしょう。そして老人たちに関して、もしも彼らがもう悲劇であるのが分からない程の演技によって示されないなら、容易に悲劇的になっているでしょう。少なくともその俳優は、ここで私たちを他の同情から守っています。この用心が無いと吝嗇はすっかり氷結するでしょう。観客たちの感じるのを学んでいることが予見されるためには、これらの簡単な見方で十分です。ところが、もしもその恐怖を一度も演じていなかった様に火が付いたなら、その時のその恐怖は思い出も無く動き回っているだけでしかありません。それは最早恐怖です。そして、弦楽器のヴィオルも又愛ではありません。そして犯罪は怒りではありません。演劇とは、私たちが身を投げること無く、感じることを学ぶものです。それは私たちの不幸という想像力の一部分を取扱い、そして手直しするものです。（完）

演劇は、私たちが自らを認識出来た唯一の鏡と類似のものを与えてくれます。そして、その伝達を保証しているのは俳優です。少なくとも私たちの表出する愛情における最も低次のものが、俳優と同水準であるのを感じさせてもくれます。それ故に俳優を低く評価するのは根拠の無いことではありません。皇帝においても俳優を見分けることは極めて重要なことです。俳優は一種の平等を保障します。詩は演劇よりも力強くありません。何故なら詩には、この低次の代弁者がいないからです。詩は単に私たち自身を俳優にさせるだけです。私たちは十二音節とか八音節の管を、叙事詩や追悼詩を代わる代わるその様に分担して人間味溢れて吹いているのです。もっと別な言い方をするなら、音楽は肉体によって私たちを高めるのであり、一種の役柄によっても夢を見ます。それから、これらの方法によって崇高さは私たちの肉体に起因しています。それは情動からの確実な解放によって、そして多分文字通りに心の解放によって告げられていると言わなければなりません。しかし精神が肉体に再び一緒になるための時間が必要です。

造形芸術のことを言う必要が何かあるのでしょうか。建築は外套のようなものです。建築は、外套以上に人間の肉体に似ていませんが、それでも大したものです。何本もの柱が群衆の通路や曲がり角を表しているとするなら、そして数々の交差が私たちの仲間の位置を敏感に表現しているとするなら、それは大したものです。以上は、それらが言っていることですが、あなたは二つ同時に見ることが出来ないのを理解したのです。群衆の中には生き生きとした孤独と一種の祈りが生まれます。キリスト教寺院はその様にして主要なことを教育します。何故なら最も豊かな生活がその中にあるからです。反対に古代の寺院は群衆の花網装飾や高貴さの違いを外部に置いた儘ですし、その中でも見通しは僅かであり、この上なく剥き出しであり、この上なく単一性です。つまり建築物は私たちを黙らせますし、法則に従って止まらせていると言えるのです。そして私は、凱旋門から去ることが出来ませんし、凱旋門そのものが数々の軍隊を殺しています。今では庭や階段や家の中で雄弁が何と際立っていることでしょう。それらは人間に相応しい窪みです。凱旋門は、寺院の中とは全く別な風に自省したり広がったりしています。それは完成とか完全なものを延期します。単に今を知らなければならないのは、私たちの情動が自分の動きに任せたり提案させたりしている空間に従って、発展したり落ち着いたりしていることです。

彫像師は私たちの独自の生活を表しますが、動きも言葉も無く、そして如何なる人生の属性もありません。いや寧ろ、人生の色合いが彫像においては嫌悪を催させることに気付く良い機会になるでしょう。そして、それは偉大な忠告です。彫像は恐らく俳優と反対です。彫像は人間が演じたり表現したりするのを拒絶する瞬間を示します。それはドラマを停止する自発的な死とか、大理石の瞬間です。無感覚は、重要である私たちの情熱の一部であり、私たちの感情と同じものです。それは俳優を黙らせて劇場を空にして仕舞い、団体も終わりにします。この種の救済や一瞬のこの修道院は、私たちの全ての情熱と変化に適していますが、決して新しいものを創ったりしません。そして、それは全ての芸術に言うべきことです。演劇の感情は決して無いのですが、私たちの全ての感情に相応しい瞬間の演劇はあります。それは、私が理解するのはそれらのことを熟考し人間的にして、そして私たちの重荷を軽くして鎮める者です。そして誰も美しい彫像に感嘆しません。そうでなければ、その意味では決して何も言わないもう一人の批判者のための特別なドラマに彼は従います。彼は何も言いませんし、それが彼の答えです。しかし、彫像の形をしたあらゆる部分を大きくしたり固くしたりしないのは誰なのでしょうか。

緻密さは余りに早くやって来ます。人間の心は又、他にも抵抗する力を沢山持っています。そして、今は絵画のことを何と言いましょうか。絵画は芸術の中で最も生き生きとしています。何故なら、それは継続させる必要が無く、継続させることも出来ない一つの外見に固定させているからです。絵画は逃げ去る全てのしるし、視線、視線の精神、赤い色、青い色を不動のものにします。但し、死に似ているものは何もありません。有名な肖像画の中に、私たちが熟視するのは

恐らく全く純粋な生命です。正確に言うなら、それが絵画というものを生んでいるのです。何故なら、人は肖像画の人々が何を考えているのか言う術を知らないからです。その様なことを考えることもありません。彼らが恐らく私たちに言えるのは、生きることは美しく、それで十分であるということです。でも、何故言うのでしょうか。彼らが表現しようとしているのはそれ故に崇高さですが、それは肌の下や両眼の奥底にある血液によっているのです。それは恐らく既に他の瞬間であり、私たちの感情とは別の動悸であり、彼らを休めるための他の好機であり、そしてそれは最も愛しい彼らのイマージュの上にあるのです。というのも私たちは再び満足するに違いないからです。私たちの運命は、自分のことだけしか考えない人間を愛すること、それと同じことをする人に感謝することにならないのでしょうか。それは争う考えを決して公平なものと受け取らないことです。ところで、それは極めて公平な善であり、そのことを絵画は私たちに教えています。でも、それらの全てを感じるための学習には証拠になるものが無いのです。（完）

第九章　自 然

全ての芸術を乗り越えて挑む一つの美が、まさに自然の中にあることを何時かそのうちにどんな人でも感じます。そうです、一つの美です。単に天候の良い日々ばかりでなく、一年中あるものです。現存する美であり、恐らく純粋な存在の美です。そのことを私に考えさせるものは、自然が私たちを知らないかの如く見えるだけに、それだけ益々自然は美しいということです。海や砂漠や氷河には、その無感覚さによる瞬間的な美があります。私たちはそれ故に見捨てられます。以上は、私たちに健全さを回復させる感情です。しかし、この感情は愛、野心、あるいは吝嗇と同じ感情であり、少なくとも立て直されたものであることを良く理解して下さい。私たちを満足させるものは何も無く、この世界は私たちに何も約束していなかったという思想から立て直された感情です。この感情はまさに崇高です。というのも、その人がもしも自然を美しいと判断するために、どんな力も十分に受入れられる寛大さを自分自身に発見しなかったなら、粉砕される脅威のあるこの人生を熱狂から常に受入れるのは説明がつかないからです。この世の人間の陶酔を人は容易に認めます。しかし、それはその存在を認めながら、いやその存在もどうだか怪しいのですが、中心になるのが縁で何時も裏表を持つ限界を認めながら、その時に私たちにこの陶酔を齎しているのです。そして私たちは自問します。「他の世界がある。いや、他のものも怪しいのだ」。そこから齎されるのは簡単に言うと、人生が美しければ美しい程、私たちはそれを失うことを心配したりしません。その上に、感嘆させられる人々の群衆は、誓いによる僅かな悲しみに対しても殆ど全員が揃って応えます。彼らは恐らく最も強い感情に対して戦います。そして一種の幸福をそこから引き出します。全てを受入れるあの世には、既に全てを拒絶する力があるとするのが私たちの内奥です。その最後の瞬間にはキリスト教徒になり、そうでないのは異教徒になります。私たちの愛情による救済は、これらの二つの道によって殆ど同種のものに形成されると多分判断されます。

しかし、新しい心の大きさをより良く測るためには、この世の屋根の下で蹲った人間の数々の感情により近い処で判断しなければなりません。この光景はどんなものでも大きくて美しく、そのことは私たちの感情が自分自身に委ねられていると言いたいのです。しかし、この内省は私たちを締め付けたりしません。そして大変に奥深く秘められた内部の私たちの魂は、この世の奇妙さと非人間性の中ですけれども、私たちが自分の家にいる様に、その時はそれらの世界の彼方へ広がるのは大変な真実です。というのは、大空の青さよりも奥深く秘められているとか、私たちの魂のためにしか水平線でないのが極めて明らであるという水平線とは何でしょうか。実を言えばその広大さは、この世で陶酔するまで気に入っているものとは別ものでしかありません。それらは隔たりの距離と多様性のしるしです。それらの辛いしるしは私たちの境界の中にあります。そして私たちの喜びが、私たちの境界を飛び越えているのを認めましょう。この世において安全に前進しないことが、ここにある草、あちらの岩、もっと遠くの水という別のものに続く存在や、決して傷付けない見せかけによる現在の深淵だけを如何に知らせているのでしょうか。私たち

の冒険が、ついに物語という奇跡的な形式で自らに課するのは、存在のこの側面によってです。私たちは他の幾つもの意志を中断します。しかし次に何か素晴らしいものであって、それらの数々の道として私たちの選択が開かれることを期待します。道や至る所の十字路を除いて、この世とは何でしょうか。表象としてのこの世は私たちを表すための私たちの力です。私たちには何処にも身に付けない知覚はありません。固い岩は私たちを傷付けるかもしれませんが、上手に運ぶことも出来ます。敵としての私たちの肉体と関係しますが、私は何時もそれを友として理解することになります。私はそれに沿って行き、細かく調べます。私が望んでいるのは、そのことだけを頼りにするものです。以上は人間として元の場所に返す様なことです。その通りです。理解することとは人がいる場所とか、こう言っても良いのですが程なくいるであろう場所を知ることです。ラニョーはその場所のことを良く言っていました。それは私の能力のイマージュです。そして私の無力の時間をつけ加えて言いました。何故なら、翌日がやって来るのに意志は全然重要でないからです。待つだけです。そして眠っていても時間の仲間になるのです。従って時間に知覚は決してありませんし、自然が時間を忘れさせるのは単に私たちが支配しているものだけを示しているからです。それは庭や畑や道路の様に私たちの仕事になっているものです。そして家々でさえも既に自然のものです。両眼を開けている人間は絶えず運命を作っています。道でしかないが、思い出すのを告げている数々の感覚の中のこの部分について思考することを彼は気に入っています。意志が運命と対立する様に、この世の思い出は魂それ自身の思い出と対立します。私たちの歩み同様に、どんな幸福も全てが何か新しいものを物語っています。そして、もしもあなたが倒れたとしても、誰も告発しないで下さい。従って、もしも私がその様に言えるなら、私たちの忍従によって軍隊の部分が作られますが、その部分は無謀であっても先を照らしていると私は言いたいのです。（完）

第十章　労 働

労働によって体刑や懲罰が行われましたが、それはこの世の見世物から区別されています。敢えて選択する時、私たちは恐らく戸外の労働しか最早受入れないでしょう。というのも樵から未成年者までは大変な隔たりがあるからです。私たちの広めた足跡の前にある大地よりも、農作業された畑は何と美しいのでしょう。畑や庭や村や鐘楼などのあらゆる労働のしるしを見ながら、それを愛さない人間はおりません。何故なら鐘は道路を呼び起こし、鐘楼はそれを示しているからです。大地での労働の様相はまさに平然とした神のものですけれども、神の愛が如何にしてこれら全ての事物の愛になるのかをまだ言わない様にしましょう。しかし私たちのもっと身近では、労働は諸法則の試みであり秩序の認識であると言いましょう。そして、大地の上での労働以外の労働は、視線を投じて過去と未来を判断します。この労働を除いて、諸法則の経験も秩序の認識もまさに決してありません。水の中で砂糖を溶かすこととか、水素に酸素を吹きかけることは、秩序を体験することでは全然ありません。寧ろそれは無秩序を体験することであり、それは他者の労働に力を加えることです。あなたがそれを経験に変えるのは、製糖業者や坑夫や運転手やポンプ作業員になることです。あなたは、人間とは反対に向きを変えるその人間についての試験を何度も行うのであり、それは彼にとってもあなたにとっても信頼出来る行為です。

真の労働は人間と共にあります。それは畑や庭の労働であり、その視線に基づいて形づくられた幸福な数々の交換です。そして労働による分割がありますが、決して人間の分割までは押し進めません。少なくともそこから偉大な宇宙が夢を失うことはないのです。私たちの労働は、際限の無い存在に対する自分の足先での序文の様なものです。抵抗するものは存在します。私たちの労働、道、畑、境界、梁を成している柏材を残して置くのは、誠実で純粋なこの世界ですが、情熱にとっては奇妙なものなのです。しかし私たちの感情の上では、同様に何という効果なのでしょう。実際は、宗教的な愛も同じく労働によって増大します。修道士たちが労働を何時も実践しなかったとしても、労働を知っていました。それを細かく見てみましょう。

先ずは人間たちにとっては取り入れが気に入っています。私は、人間たちが望んでいることを行い、そしてそれが彼らの善であると理解します。しかしながら悪の労働は、その人間を軽蔑させることになります。人間は、人間を信じることに対して復讐するからです。同様にそれらの結果は、弓のように人間を引き絞る時、非常に意外なものなのです。危険な材料です。そして如何なる方法でも、材料や道具の様に人間を雇うことは許されません。最も崇高な愛は、そこで死ぬことから齎されます。何故なら人間を取り入れるこの仕事に似ているものは私には最早無いからです。そして私は、この気まぐれな材料を既に憎んでいます。この人間嫌いの見方は愛を育みませんし、野心や吝嗇でさえも育みません。最後の吝嗇の情熱は同類を信用したくないのです。
でも、その情熱は最も同類に支配されています。大地の労働のことに取りかかりましょう。労働は私たちの思考にとって神聖であり、愛情にとっても神聖です。昨日の溝畝は一つの見本です。過去が止まっています。この不変さが私たちの生まれつきの軽薄さに恥をかかせます。瞑想への

失敗は、私たちの可能と不可能を満足させる夢想の中にあります。私たちの手から逃れている数々の事物を、必然性に従って考察するには大きな注意が払われなければなりません。しかし人がそこに至る時、私たちの情熱はそこで鎮められると言うことが全くその通りであるかどうか、私には分かりません。スピノザはデカルトに対して大変な怒りを表していますが、そのために私は完全にスピノザを信用しています。〈必然性〉は学者の一つの思想です。学者が一人の人間であると信じることは誤りです。その人間のあの世の労働に従って彼の労働のことを考える、その人間の経験を私たちは未だ持っていません。労働の全体像はあらゆるものの中で、最も臆病な実用主義的偏見の元にしか試行されませんでした。その労働は、自分の労働のあの世を決して考えない人間を納得させることが、正確な意志なのです。それは労働を裏返しに始めることです。しかしながら、労働は何かを説明しています。それは世界が他のものになることも出来ます。更に換言するなら、私たちが世界を整備して管理するのに応じてそれが出来るのです。この観念は発明品を発明する産業の中に逃れます。この観念は自然から出発して、物が発明される農業の中で輝いて現れます。要するに労働は私たちに寛大さを伝えますが、寧ろ私たちの裡の寛大さを目覚めさせるのです。そして寛大さとは、デカルトが自由の感情に与えたい名前です。そこには私たちの崇高さがあるからです。畑にしか崇高さは無いと簡潔に言いましょう。先ず第一に、必然性の思考である他のものは卑しいと理解しましょう。それは自己とその他の者たちの希望を拒むものです。愛も拒むことでは同じであると言いましょう。良く理解するならば、愛という情熱はありません。寧ろ、愛という数々の行為があり、それらが愛を救済します。それは解釈する以前に熟考することを望んでいます。何故なら、私たちは死者たちの灰の上を歩いているからです。

以上が労働に関する第一の美徳です。そして美徳の言葉からはどんな意味においても、ここで私が伝えることに如何なる苦労も無いことに気付いて下さい。ところが私は又、労働の中に他の美徳も発見します。その美徳は、より優っているのと同時に私たちの下にもあるものです。その後に、私たちは気分にはうんざりで、決して信用しないと言うべきでしょう。気分は簡単に私たちの流体の流れの動きから成っていて、筋肉の収縮によってこっそりと押し出されます。そして、それは行為への期待だけが苛立たせることを生んでいるのです。それに反して、行為がこの種の気分を癒すのは経験によるものです。私たちはこれらの状況に応じて短気とか臆病とか恐怖と呼びます。かくして私たちが知らないうちに、労働は私たちの情熱の低次で殆ど機械的な部分を癒します。それは些細なことではありません。オセロ（1）の両手は、彼が何者かを絞殺することを想像した時は、仕事も無く空いていたのです。（完）

（1）「オセロ」は、シェークスピアが創った五幕の悲劇（一六〇四）。ムーア人の将軍オセロが将校イャゴーの奸計から妻デスデモナを絞殺したが、真相を知って自刃する。

第十一章　退 屈

退屈は大王国を創り、専ら思考されるに応じてその支配を広げます。退屈は非常に何時も思考と一緒なので、この指摘そのものは思想が大変に平凡であることに私をびっくりさせます。私の知り合いだった或る激しい思想家は実際に陰鬱に思考していました。しかし何とか我慢出来る瞑想に大変上手に収まっている夫人たちの仕事を、彼の個性としては同意出来ませんでした。彼は、私には殆ど好きでもない二つのことが好きでした。それは散歩と会話です。私を困らせるのは退屈しかないのも本当です。その点に関して言われていることは、スタンダールの小説『赤と黒』の恐るべきマチルドを見ればお分かりの様に、退屈の薬になるのは情熱です。しかし、ジュリアンが直ぐに行動に移すことには注意しなければなりません。ジュリアンが梯子を立てている間に、マチルドが如何に考えているかを言います、「私が一時間前からあなたの動きになっているのね」。そして、この娘は真の情操へ自分を高めることが出来る唯一の観念を大変高潔に形づくります。彼に注意せよ、と彼に勇気が不足していれば彼女は考えます。私たちは〈思考の水車小屋〉である友人から遠くにいるのです。

退屈とは、私たちが情熱しか意識的に思考しないことを示すものです。ところが同様に、精神の自然な高邁さにより、この種の光景は容易に気難しさに変えます。気分は横柄なものであると指摘することが出来ます。それは、その様な動きから救済することに決して同意しないものの証明です。笑わせる人々は決して感謝されません。それは私たちに対して並外れて大きな力でしかありません。僅かな瞬間に私たちを動かす者たちも又同じです。偉大な肩書が要求されます。それに反して友情は、何時までも退屈に打ち勝ちます。退屈には驚かされるだけです。しかしながら退屈が高次で決心されるのを誰も気付きません。低次の方法では、何も出来ないことしか誰も予想しません。面白がらせる人々を望む者は、それらの方法を軽蔑しますけれども、その様なことが定めなのです。そして面白がらせる秘訣は、面白がらせることを考えないことです。それは実際は恐らく、あらゆるものに奇跡があるのを知ることであり、思い上がったしるしとしての情動の幾つもの感情を少しも愛さないことです。教養があって類い稀な人物たちでも、直ぐに気違いじみた様な会話になることに私は気付きましたが、如何なる真面目さにもお構い無しです。寧ろ、真面目さなど直ちに撲滅して仕舞います。その様なものが精神への贈り物になります。しかし間違えたり数々の思考を求めたりすると、不幸になります。普通の運命はその人を恐がらせますし、この領域は飛躍や驚嘆によって飛び越えなければならないと言われています。恐らく崇高でない思考以上に最悪のものは何もありません。激しく笑うことは従って、その信頼によって崇高になるでしょう。そこから精神は全てを嘲笑する、と余りに早く結論が下されます。でも、決して嘲笑しないことです。寧ろ解放されます。何から解放されるのでしょうか。多分、あらゆる義務からです。多分、憎むことからであり、愛することからです。退屈は精神のものであり、何処で捕らえられるのか最早分かりません。私たちの一人ひとりが不条理なやり口に驚く必要があります。恐らく、大変に稀有で貴重である真の愚かさしか楽しくないに違いありません。非常

に難しい賭けからは活気が生じます。それは偶然を当てにするだけで、学者ぶることよりも上手に勝てます。学者ぶる者の名誉は、はしゃいで騒ぎ始める様なものです。要するに精神の全ての言葉が不足していると言わなければなりません。その代わりに退屈が辛うじて彼のものを組み立てます。そこから私が理解することは、恐らく低次の状況は十分に評価されないことです。何故なら、恐らく直ちに勝利が獲得されるのを見ないからです。精神は自然から生まれますし、自然から蘇ります。それ故に屡々思考の二番煎じは最早興味を引きません。数々の籤のある袋の中を振り落とす術を最早知りません。詩が、思考された偶然から生まれることに注意して下さい。数々の思考を一篇の詩から抽出したり、散文として保存するためには、まさに真剣にならなければなりません。思考のためのどんな人生も消えて仕舞います。退屈はその様に思考を計算して小さく山積みにされた灰に驚きます。ところが退屈になり始めたとしても、消えて仕舞う愛情は決してありません。そして感覚に満ちた詩は愛情を救済します。最も大きな愛のしるしは幼年時代の楽しさです。その様なものが恐らく野心のしるしでもあります。何故なら、その時は普通の栄光は振り落とされるからです。吝嗇も虚栄心からではないことに注意しなければなりません。吝嗇は人が言うことを無視します。従って精神でないことはありません。兎に角、吝嗇家が退屈を知らないのは事実です。しかし、本当の愛を感じることよりも、本当の吝嗇に到達する方が容易ではありません。そして退屈とは、情熱の普通の領域において空になった障害物の様なものです。退屈を貫通しなかった感情はありません。そして類似のものを当てにしたり、退屈を紛らせるために類似のものを連れて行っても何時も無駄になります。この考えは勇気を竦ませます。いいえ、そうではありません。幸福にならなければならないのは自分自身です。そして、余り幸福でないという怖れだけが大きな不幸です。しかしながら、私たちの普通の状況に対して最も大きな不幸は、幸福にならないという覚悟です。この用心は傲慢なのです。（完）

第十二章　愛情の諸段階

楽しみでも苦しみでも或る段階で私たちに関係しているものは何でも、私は習慣に従って愛情と呼びます。この本の前頁の方でお読みになった数々の準備の中で、私が説明したかったもの全てにおいて、私は幾つもの愛情の段階と関連付けていました。私は、今はそれを一方の人々と呼びたいと思います。その情熱は中間的な段階であり、恐らくそこに止まることはありません。例えば宗教的な情熱は、愛や憎悪や恐怖や希望が最早規制される術が分からない位に激しい状態になっていて、それの付属物である思考でさえも分からない位です。情熱は常に不幸です。情熱は低次の段階でしか休息しません。あるいは最高次の段階でしか休息しません。低次の段階には思考がありません。その段階は活動から成ります。あるいは失神状態から成り、単に震えとか不安に至る心配などから成っていますが、それらは事件とか状況から直接的に生じます。屢々それは衝撃になります。時々は悲しかったり幸福でさえある仄めかしになります。いずれにせよ私たちは自分が平凡な人間であるから自分は囚人であると感じます。そして情動は、私たち自身のこれらの出来事を最も良く指摘している言葉です。私たちが自分を思い出すこと、予測すること、そして一言で言うなら私たちの情動を考えることを思いつくや否や、情熱は何ものかを見本にします。かくして不安と希望が恐怖を伝えます。それらは恐らく予想した恐怖とそれらの薬への躊躇から成っているだけです。そして私は、恐怖によるこの恐怖に十分注意して欲しいと思います。この恐怖が全ての情熱にあるのは確かですし、その主要なものは多くの人々の中にもあります。そこに話は戻らなければなりません。私たちが情熱から逃げ去り、そして私たちが自分の情動を探求し調整して提供する最も高次の段階のものに関しては、それを情操と名付けなければなりません。しかしこの力強い表現には説明が必要とされます。

人が存在するのは最早重要でないと分かるや否や、人は情操を失うと言われています。情操は失う危険を負っている状態のものであることを、そのことは私たちに教えています。勿論、それは幾つかの低次の段階と判断される状態でもあります。それら自身によっては最早何も分からない大変に低次な処へ再降下しているのです。それらの幽霊のようなものへの単純な恐怖は、単にそれらの幽霊を理解しないだけでなく、自分自身も知らないことになります。それは激しい恐怖であり逃走でしかありません。そしてその状態は数々の物語によってしか分かりませんし、見分けもつきません。それらの物語は誤りと懲罰についての大変に高次の判断が前提にされています。それは神と共に暗黙の同意がある物語の語り手の安心を隠しています。作者が激しい恐怖を考えつくのは、そしてその恐怖に何時も再降下する恐怖の中の恐怖を考えつくのは、物語のとりなしによります。別な言い方をするなら、何も知らない恐怖の夢から目覚めるのです。それには次の理由があります。懲罰や地獄の劫罰や改宗という宗教的出来事が、普通の出来事のやり方では決して行われず、常に物語の中で行われます。それらは自分にやって来るように誓いますが、同様に高度な情操によって守られているのを感じます。そこには幽霊や幻に関しての多くの疑い深さがあります。この疑い深さが信頼になり、それは皆が理解する良識になりますが、この重要な

概念が十分に説明されることは先ずありません。

私が浮かんだ例をもう少し述べるなら、盲信は信頼とは反対の段階にあると思います。従って幽霊や幻想から解放されて自由になるために祈らない聖人を引き合いに出さないで下さい。それは悪魔を祓うことであると言われています。そしてそこから齎されるのは極めて曖昧な観念ですが強烈なものであり、悪の精神とも関連づけています。兎に角、それは間違った精神なのですが、何よりも先ず激しい怒りの対象と見做された全ての奇跡であり驚異です。そして他方では、これらの幻想とか恐怖は、かくして謂わば宗教の素材になります。もしも宗教的情動を根本的に単純な状態に命名したかったなら、恐怖であると言わなければなりません。何故なら繰り返すことによってそれは思想になり、これらの暗い瞬間を明るくする唯一のものになり得るからです。そして、これらの恐怖による恐怖を憎み、それらを追い払うために祈ることが命じられるからです。愛する人の屍を前にしたランセ（1）の恐怖を私は例に出します。可能な状況ですが、飛躍によるかの如く逃げ出さなければなりません。それは思い出によるのであるのに（そしてここでは思い出の一つの法則に気付いて下さい。何故なら、それは人が解放される一つの事柄であるからです）、それ故に思い出によって、まさに危うく落ちそうになった情熱の深淵を人は垣間見ます。情熱のあらゆる緻密さは、敢えて言うならこれらの状態を乗り越えて、伝説的な思い出の状態にある限りでしか分からないこの状態に依存します。そして狂信は反対に、宗教的情熱を不可能にします。その時は諸活動において表現されています。結局のところ信仰を明らかにするために、もしも狂信的活動が利用されたなら、多くのことが騙されます。それは恰も犯罪によって愛が裁かれるが如くです。それは罪のあることであり、それは失敗した愛です。（完）

（1）ランセ（一六二六〜一七〇〇）は、カトリック神学者で、トラピスト会の創立者。

第十三章　諸段階に関する他の例

愛を告げる情動は、恐怖と喜びへの希望が混合されている一種の陶酔です。愛情の最初の活動には確かに恐れがあります。そして、それは愛情というものの真実です。情動への恐れは一つの恐怖です。恐怖と希望はその中で薬になりますが、変わり易く、愛の情熱の中に見ることが出来る如く、そこでの恐怖は時々一種の憎悪まで行きます。しかしもう一度言わなければなりませんが、少なくとも幸福の閃光が地獄と天国の間のこれらの諸段階を見せてくれます。謂わば純粋な地獄は全く独りきりの陶酔であり、未知の処まで落下します。しかし純粋な天国は、その名前に悪を決して受けるべきではありません。何故なら、それは情操を生む者を愛する一つの方法であるからです。非常に慎みの無い動物的な情動を全く突然に綺麗にして、それらの情動によって愛の天職が示されるからです。そして、恐らく天国は救済された愛であり、純粋な集まりとしての伝説が大変上手に表現されているものであると言わなければならないでしょう。情動の愛には恐るべきものがあること、そして情熱も同じであることは一人の人物であるにしろ、その対象しか少しも保証されませんし、確かな人間でも同じく保証されません。従って大変に具合悪く我慢させられますけれども、偶然に依存することにも我慢しなければなりません。情熱の愛に苦しそうな息をする時、それは恍惚感に後悔させられることであり、誰かが霊感を与えられるに相応しいのを疑うことです。不公平であることは絶望的であり、まさに不正そのものです。厭らしくて馬鹿らしい人物である嫉妬深い人間への体刑の一つであり、誰もが発条で反発するが如く演じました。しかしこの種の意地悪さは驚嘆するための素晴らしい野心によってしか明らかにされません。そして、もしもその意地悪さが如何なる寛大さも無いとするなら、相手にとっても我慢がならない重荷になります。情操の愛が愛になるのであり、情熱の上で魅せられていなければなりません。これらの諸段階のうち、もう一つの例は実際に食料が不足することです。あるいは暖房に不足するとか、体力に不足することで、それらは殆ど同じことに戻ります。この冷えた情動は殆ど全てが眠りです。しかしそこから生じる情熱は生き生きとして力強く、そして欲望そのものが貯えを使い果たしますので、情熱そのものによって常に戦います。この他には過剰が恐怖です。確かにこの順番での情動は、健康に関係する不安が多く結び付きます。食料の拒絶は出費の拒絶と同じです。吝嗇とか或る種の吝嗇への偏見であり、沢山の聖人たちを含んでいます。その時は太った姿になるよりも寧ろ死にたいと思うまで、食欲と絶食について口にしなければならないと理解されています。老化を迎えに行くこの情操は、しかしながら熱烈さが無い訳ではありません。しかし、この情操は使用される熱烈さに屢々憤慨して、何らかの情熱になって仕舞うのです。（完）

第十四章　野心の諸段階

野心の最初で最も一般的なものは恐らく物を食べる人を満足させる、貪り食う動きの中にあります。それはイマージュを変えて、他の人間の実体にもなります。それは避けられません。菜食主義者でさえも生命ある物を食べます。それが如何なる行為によるのか、そして如何なる考えでいるのかを理解して下さい。彼は人間を育てるためにキャベツや人参を破壊します。人間を上手に育てるために、その時は何という意識なのでしょう。思想家の誇りのために根セロリを育てるとは、何という覚悟でしょう。私は、統治の精神を知らせている食べるという一つの方法に注目します。この征服者は自分の前と周りを見詰め、オリーヴや赤蕪の方も見詰めます。彼は自分に言います、「忍耐だ、私はそれらのものも十分に文明化するつもりでいるのだ」。

物を溜め込む吝嗇家の情動と、食べられる物はどんな物でも両手を開いて食べる準備が出来ている口を持っている野心家の情動には、沢山の相違があります。吝嗇家の引き締めを欲求と呼ばなければならないかどうか、私には分かりません。恐らくそれには、自分の欲求そのものを恐れる吝嗇家なりの意味合いがあります。そして多分、お金への瞑想が吝嗇家にとっての信仰の様なものであり、お金は全然食べられるものでないのを次の様に当てにしているのです。吝嗇家がご馳走に招待されると、大変に良い気持ちになります。何故ならその機会が利用されて共有され、彼がお金を掛けたり彼自身の食欲があることを心配することが無いからです。そして、その代わりに美食家である彼が自分の欲望そのものの儀式を行うからです。そして私はルイ十四世が次の様に言っていることを理解します。「良く働く者は良く食べる」。

ここには、私たちが心の裡で動作を模倣するが如く、気付くのに良い機会があります。何故なら恋人の彼は絶えず他の人々に命を捧げるからです。彼は人々に自由を望みますし、彼の周りを走る様に望んでいます。その代わりに野心家は、何時も他の人々を貪り食いますが、彼らに教える以上に彼らについて調べます。野心家自身の構造に彼らの全てを還元させており、恰も野心家は他の人々を消化して吸収していたかの如くです。私に似ること以上にもっと良く彼らは何が出来るのだろうか、と野心家は自分に言います。狂信者とは情熱的野心家であり、野心家とは別人であるとしか理解しませんし、諦めて彼と似ない様にすることしか理解しません。そして狂信者に固有の矛盾とは、説得したいのに説得出来ないことです。彼には出来ないのです。何故なら説得出来ないのに、彼は強制することを告げるからです。何かが常に起こるこの強制は、その説得について疑った儘にして置いて、そこから殺したい気持ちになります。ある時に、彼の様に考えないのが不幸であった者を殺すことに理解して下さい。全く何故彼はうんざりさせられるのでしょうか。狂信者は結局のところ民族を信用します。何故なら、生理的状態によって誕生以来常に和合があると思いたいからです。悲しいかな、彼は同胞しか愛せないのです。以上のことが情熱にとっての悲劇です。

狂信者は自分自身のことを良く知りません。彼は、寛大さに大変に近く、そして全てにおいて同類を求めに行くのを決心することにより、恐らくそこへ導く情操の感情によってしか明白にさ

せることが出来ません。しかしながらプラトンとかヴォルテールというこれらの人間の精神が感じ易い点を探して楽しむ時に、ディオニュシオスとかフリードリヒの王たちの裡では屢々狂信家に戻っているのが分かります。多分、この事例から分かるのは、情熱が止まることの出来ない通路の様なものでしかないことです。何故ならその時は再び降下しなければならないからです。もしも情操が本当の目的まで高めないなら、その情操が何時も自分自身を脅しているのが分かります。私はここで、例えばローマ教皇の野心において自分が絶対に過たないと信じられていると思っている時の、数々の術策に気付きます。それは将軍が喜んで信じ様とすることです。しかしながら将軍は決して信用しません。それは名誉を肩書にしている者たちを軽蔑する様に導くことです。プラトンは決して説得しないことを誓ったために、正しいことを余りに早く心配することに戻るのを明示させ得る人間の一人です。それは人間のために人間を尊敬する素晴らしいものです。（完）

第十五章　欲 望

幾つかの事例に倣って欲望を判断することが出来ますが、その人は私が思うに大変に小さな人物です。偉大な画家とか司教とか将軍になりたいと思うこと以上に平凡なことは何もありません。あるいは美しい娘に愛されたいと思うことも同じです。それは夢想でしかありません。如何なる進展もありません。欲望は何も生みません。あなたは、お金持ちになりたいと彼に言いながら、その吝嗇を笑いものにするに違いありません。「皆がお金持ちになりたいのだ。私もそれを望んでいる。私は稼いで、手に入れて、守っている。沢山の方法を考え出して、それらを活用する。既に三回以上も全てを失ったし、全てを盗まれた。あゝ、酷く悲しかった時代であるが、私の両手には未だ転売出来るものが一杯あったのだ」。私はスタンダールの『ユダヤ人の話』のことを考えます。そこではスタンダールが、何時も稼いでいて機嫌が良い男のことを書いています。他の者たちも絵を描いていて機嫌が良いのです。でも、画家になりたいと思うことは、まさに別問題です。私は欲すること以上にまさに言うようになるまで行くに違いないのですが、行うことは自分に禁じます。従ってその男が望んだことを少しも手にしなかったので、嘆く時でもその男は真実を言います。

それ故に私は、それを欲するための情熱の中には少しもその場所を見ません。情動の中にも見ません。必要であることが肝腎です。そうです。何故なら必要が私たちを探し求めていて、私たちを巻き込んでいるからです。「私には歩くことが必要だった」と歩く人は言います。でも、欲望が私たちを巻き込むことは決してありません。女性を欲することから、女性が支配されることには至りません。しかし女性に望むことからは時々、女性を愛するに至ります。お金についても又事情は同じです。何故なら拾ったお金や貰ったお金は好まれないことに私は気付いたからです。その様なお金は惜しげも無く使われます。反対に稼いだお金は、結局は好んで大切であるのを知る様になります。ところで人は親切を受け入れたい欲望を持つことも出来ます。でも、それでは一本の指も動かすことがありません。欲望とは怠惰です。欲しているものを確実に手に入れる方法を与えて下さい。あなたはそれの出だしの悪さがお分かりになるでしょう。情熱を認識することは欲望にはありません。賭けの情熱は遊ぶことから齎されます。その情熱は如何なる欲望も齎すことが出来ません。さもないと心配が鎮めることになるでしょう。そして賭けが欲望や心配の向こうに、まさに賭け事好きな人を先導するのは明らかです。しかしながら近くを見詰めましょう。ここでは主導者が心配です。賭けは心配に勝つための一つの方法であり、最初にそれを感じるための一つの方法でもあります。人は命令します。そして直ぐに答えが出ます。もしも勝ったなら、更に好機があるだけです。賭けには殆ど希望がありませんが、自由への試みがあります。私は欲望には決してそれを見ません。勝つのを欲する者は、負けないことも欲します。そして賭けを見て、欲望を観察するのは滑稽です。それらは重要でもない利益であり損失です。勝ちたい一心から賭ける必要性と取り違えてはいけません。

私の意図は今、秘められていて大変に激しいあらゆる野心に隠されている、賭けの情熱に注目

することではありません。又、単に欲望のあらゆる場所を発見することでもありません。そして私は、軽い欲望の知覚や意欲の下にもその欲望を垣間見ます。恐らく、それは虚栄心の一部でもあります。そこには羨望もあります。それらは別々の情熱であるように私には思えます。羨望する人は嫉妬する人ではありません。羨望する人の裡には何か欲望の裡と同じものがありますが、それは意欲を拒絶するものです。

欲望はまさに愛の下にあります。しかし、恐らく愛と同じ道ではありません。愛が無ければ何もお金を使わない、相手の幸福と一致する幸せの力による感情と共に愛は始まります。この種の経験はそこで管理し、そして管理されていますが、正確に言えば同じことで、それは始まりしか気に入りません。人はその終わりを決して考え込みません。そこに到達することは自問しません。寧ろ文字通り信じ難い動きによって終わりの方へ運ばれて行きます。それは行うに至るのであり、意欲に気付きます。欲することは全く別のことです。私は歩く時に、この意欲に大変高潔な女性を思い浮かべています。私は最も些細な方法を見ることもありませんし、何でもない始まりも無くその意欲を思い浮かべています。反対に愛する者は、更にもう一度素晴らしい混合を試みるために早く立ち去ります。愛は臆病で内気であると言いながらも、良く話をするかどうか私には分かりません。愛がお喋りで何時間も貪り食う様に話しているのを私は何時も見ました。それは十分ですし、非常に十分です。如何なる欲望もそれと反対であったとしても大したことではありません。まるで相手が言っていることを自分に適合させるのを望んでいるかの如くです。そうではなくて、彼が言うことは何でも正しいのです。会話は何よりも必要かもしれません。しかし愛には最早、何よりも必要なものは何もありません。天気が良くても、雨でも、戯けていても、真剣でも、全てが同じです。従って欲望は常に無礼です。自分のために相手を役立たせる意図があります。この道は軽蔑へ導きます。その代わりに愛することの美しい企ては、相手の人格を尊重し、その人を自由で幸せで力強くさせたいと思う様に導きます。私は、意欲であっても欲望ではないと言います。成就への期待と、成就を奪ってしかるべき場所に置く行為とは、大きな相違があります。勿論、私はここで余りに多くのことを同時に仮定しているのに気付きます。私が私自身に自ら説明したかったことは、欲望には寛大さが無いということです。（完）

第十六章　羨 望

羨望する人は嫉妬する人ではありません。それは似ている様でも、まさに大変な違いがあります。羨望は嫉妬とは全く反対であると考えるまでになるでしょう。何故なら嫉妬には、愛することの成就に喜びがあり、それらの成就が泥を塗られたり無視されたりすることになれば、最大の悲しみがあるからです。反対に羨望する人は誰かの成就を我慢して、それを想像するのを小さくしようと努めます。羨望する人は自分自身のために、その様な成就を欲することがありません。彼が欲するのは寧ろ外観の結果であり、世評です。それは文字通り期待することであって、強く望むことではありません。しかし、ここで詳しく見なければなりません。羨望する人が実際の成就を達成するための努力をしないことを、私は決して理解しませんでした。彼のやり方は如何なるやり方でも構わずに十分に役立つと信じており、彼の観念は如何なるものでも構わないのです。従って羨望する人は足蹴りにされてその場でやつれて仕舞います。平凡な仕事でさえも深く出来なくなります。そうして彼がそこで苛立つのは、一方の人々は感謝に値するのに、もう一方の人々はそうではないからです。世の中で成功する人々は偶然のせいであると逆に彼は信じ込みます。しかし彼は、もう一度偶然に助けられる礼儀正しい態度を取り始めなければなりません。ところがそんなことは理解されないのは同じです。真の羨望の対象は、純粋な幸運によって到来しているものなのです。そして、その中では羨望が一種の虚栄心になっているのです。でも、それは未だ空想上の虚栄心です。彼は光輝いていて素晴らしい場所の中で、純粋な幸福によって想像しているのです。達成を目指して労働する観念だけが、羨望する人に恥をかかせるのであると私は思います。彼は多分そんな方法では成功しないことを、心の奥底では確信しているのです。その上、人が彼の気に入って全てを与えるために彼に飛び込んで来ないのが分かると、彼は最初の態度では飽きて仕舞います。ここには羨望の窪地があります。何故なら羨望する人は決して敢えて望んだり行ったりしないからです。彼はそれ故に欲望とその結果の間の道を見ません。もしも見たなら、彼は歩き出して他人と比較しないで自分自身の進歩を考えることでしょう。しかし羨望する人には多くの影響力があります。でも、労働に意味があると思っていません。彼は才能を持ちたいと欲しているから、純粋な才能しか信じません。しかし労働することもありません。従って彼はどんな労働も、産業的手段で生産されることを証明するのでしょう。例えば詩は創るのが困難で退屈なものでしかありません。しかし誰も詩を忘れることは出来ません。労働を値踏みして見比べる批評家の仕事は、それ故に羨望する人の仕事です。彼は感嘆して見ることがありません。従って彼は自分自身を感嘆して見ることもないと私は理解します。少なくとも彼は人と同じ様に上手くやれると思っています。それ故に彼は好機を待っていましたが、無駄でした。

羨望はそれ故に全ての情熱にとっての、或る瞬間に違いありませんし、全てを制限するでしょう。全然吝嗇家でないのにお金持ちを羨望する人がいます。そして、全然恋人でないのに恋愛を羨望する人がいます。羨望する人には野心が無く、反対に野心というものを捨てに行くことを私は指摘したかったのです。同様に、恋愛というものを捨てに行きます。重要な地位や美しい女

性たちを籤引きにする様なことは未だ考えられませんでした。彼はその時、仮面を取った羨望する人となって喜劇を自分で演じているのです。籤引きにするのは吝嗇の状態だけです。そして、その様な籤引きが、純粋な欲望に陥れるのに気付くのは大変に面白いことです。何故なら百万フランに値するのを人が知っていたかどうかの知識に関する問題は、提起されるべきではないからです。その問題はあり得ないからです。更に、虚栄心はここで全くの孤独を演じます。それは全体の不公平を自負します。正確に言うと制度において設けられた不公平を自負します。もしも賞金で得をした様な地位を獲得したとしても、軍の統帥らしい重要な役割を務める術は知らないでしょう。もしも当代で最も美し女性と一緒になったとしても、恋人の重要な役割を務める術を知っているのでしょうか。勿論、復讐心があったり成功によって羨望する人がいるかも知れませんので、人は悩みます。百万長者の役割に関して一人ひとりは、それを演じることが出来ると思っています。恐らく、全員が何か間違っています。情熱は虚栄心に無いと今、人は気付いているのでしょうか。（完）

第十七章　虚栄心

両手の中で虚栄心の問題を混ぜて一つにすると危険を負いますけれども、虚栄心を論じなければなりません。しかしながら虚栄心が確実性を帯びるのは、虚栄心は愛他主義の感情の中で最も詰まらないものであるというコントの指摘によってです。有名な人を真似ることで自慢するのは、世評に全てを捧げることです。お金持ちの人と同じ名前であることで自慢するのも、多くを世評に捧げているのです。殆どの人がレジョン・ドヌール勲章を自慢するのは、しるしを生きているのです。少しも書かなかった作品を自慢するのは、その作品が全然評価されないのではない限り、如何なる作品にも全く内容が無い訳ではないからです。逆に、読者を求めない作家は一種の怪物です。そして全てのしるしを軽蔑する人間はどうかと言うと、殆どが大人ではありません。虚栄心の中にはそれ故に、世間体と良く呼ばれているものが些かありますし、それは品行方正の一部にもなっています。何故なら品行は一人ひとりの行動について、あらゆる世評の力に存しているからです。オーギュスト・コントは白日の下で生きたいと思い、そして隠蔽したいと思うことを悪と見做す人々の中にあって最も有名です。それ故にこの人間のことを決して嘲笑すること無く、人は虚栄心の全ての意味合いを十分に述べることが出来るでしょう。この仕事は当面最も住み易い職業になることでしょう。確かに私は、各人が人目を欺く会話を無視しませんし、彼自身も同じく無視しません。この演技は演劇では高貴なものになります。そこでの仮面は不実な人をやり過ごします。その仮面はその時、数々の告白を放任します。しかし虚栄心の強い人を五幕も生かせないのは本当です。そこには情熱がなければなりません。眼の前で孤独の人として存在するのが全てです。この独白劇にあるのは何という虚栄心でしょうか。情念が求める真実、そして単にその匂いの後を吠える真実は私が第一に考察したいものです。しかし虚栄心の中で最も大きな風景を、一つの見方として考えるのも無駄ではありません。その見方は本当の美徳も悪徳も等しいものであり、そして男性も女性も全てのアルルカンのマントも等しいものです。例えば、誠実には二つの側面があります。正直な商人は仲間の考えと自分自身の考えを斟酌します。泥棒も人殺しも同じです。演劇の人物や同業組合の名誉ある人にも少しあります。どんな道徳も、虚栄心という言葉で書かれるかも知れません。しかしここで私が主に関わるのは情熱と情操です。これらは恐らく全く偽善から離れることが決してありませんが、通り抜けるにしろ諦めるにしろ、難関を切り抜けるとか引き下がるためには確かに頭の働きを与えます。そして、それが恋人や野心家や吝嗇家の運命を生むことになります。それは良くあることでもあるからです。何故なら、どんなお金や力や愛情にも虚栄心が見えるからです。彼は直ぐにそれらのしるしから引き下がりますし、最も素直な情動の中でこちら側の真実を探します。そして、その生き方はあらゆる行過ぎと世をすねた態度に閉じ込められます。それは既に精霊や威厳の一部になっていて、その飲酒癖は我慢のならないイマージュになります。あるいは反対に、それらの本当の主張まで押し進めると、狂気の理由を手に入れます。それはもう一つの王国への道であり、思想の支えになります。これらの足取りにおいての衣裳方である虚栄心は、厚底靴と式服とかつらを身に付けて

何時も私たちを追っています。積極的に話しかけられるのは善き女性です。彼女は、本物でもない情熱という才能を輝かせます。彼女は、明るくて全く誠実な親切心から、時々あなたの好きなことさえも与えてくれるまでになる仲介者です。その時それは情熱の中でも最も激しい演劇になります。そして恋人が真の愛を求めること、野心家が真の力を求めること、吝嗇家が真の裕福を求めることを、それ以上適切に理解させてくれるものは何もありません。それらの輝きは恐れられています。彼らの名前で事物が呼ばれる虚栄心だけしか多分ありません。デュドレー夫人は言いました、「私には荘園に、最高の説教師がおりますわ。私にはとても出来ない説教を、彼はあなたに大変上手にして下さいますわ」。虚栄心は私たちにその骨しか残しません。この恐怖は全ての情熱を悩ませます。（完）

第十八章　名 誉

ここからは最も虚しいが最も一般的で、独自の弁証法に従って言うなら最も現実的な概念のことに入ります。名誉のことですが、それは世評でもあります。その様なものから先ず見えるのは影です。ここからは沢山の大袈裟な演説があります。だが、軍人たちの名誉、商人たちの名誉、女性たちの名誉、最も卑しい男性たちにも名誉があることに変わりはありません。これらの判断の手軽な点検については、次のような指摘を行わずにはいられません。先ず、名誉を傷付けるのはどうでも良いとすべきではありませんが、少なくとも自分自身の名誉を持っていると見做される人々にはどうでも良いとすべきではありません。しかしながら単純な噂で名誉を傷付けることが出来ます。しかし低次の世論とか無知の世論に負っているもので判断されるのは、名誉が既に社会のものであるからです。いずれにしても名誉の判断は、名誉を持っていると見做される人々に属しています。要するに自分の名誉が傷付けられていると理解したり、あるいは名誉を回復したいと思っている不幸な男は、それによって真の名誉を求めているのと同じことになります。彼は忠告や助けを求めているのです。若くて頑健な男の事例を考えて下さい。彼は長い戦争の時代を通り抜けて来たのですが、決して危険な目に遭っていません。あるいは大変簡単に捕虜になって告発されているのが判明している男です。これらの男たちは恐らく自分自身を自分で裁くのでしょうが、何時も誰かの前で弁解しなければならないでしょう。何故なら名誉が認められなければならないからです。名誉に関する裁判は、彼らの心の平安を回復させることが出来るでしょうし、その上容易に彼らの平等への尊重を回復させることが出来るでしょう。結局のところ名誉に関する判決は、不名誉な判決そのものを裁きながら、あらゆる争いの進捗を前もって禁じることが出来るでしょう。かくしてその裁判は、名誉の無い人間に判決を加えるのは不名誉であると決定することになるのです。しかし、これらの制度や判決を持たないような社会は決して無いのです。女性たちで生きる卑しい男性たちと同じです。名誉のこれらの二つの性格は、ある意味では純粋に外的なものですが、一人ひとりは良心の沈黙の中で判断を下します。そして実際の名誉は、これらの秘密の判断力と公的な判断力の一致から成っています。これに倣って幾つかの現実的問題を検討してみて下さい。レグルス（1）は名誉から、敵の連中にひっくり返されるまで余儀なくされたのでしょうか。何故でしょうか。テュレンヌ（2）は名誉から、泥棒たちに慣れて誓いを守るまで余儀なくされたのでしょうか。何故でしょうか。スパイは名誉を傷付けられるのでしょうか。何時でしょうか。何故でしょうか。

隠された発条を発見するためには、全てに罪を許された人間が、もう一度名誉を傷付けられたと自ら判断する場合を点検しなければなりません。それは他の人々が知ることの出来ない心の内面の状況を知ることです。例えば彼が囚人に戻されたり、非常に恐いと思っていたことを思い出すので、その好機を願っていました。あるいは彼は戦いの時には、勇気が好機を放棄していました。しかし恐怖を感じる事実だけで、傷付けられて仕舞うのでしょうか。全ての英雄はそうではないと言います。そして譬え逃げたとしても、人は危険な行為と、決然とした意志で常に名誉

を回復することが出来ます。以上が決闘の持つ意味です。そこには好機が無い中で、好機を提供する告発者がおります。この論理に間違いはありません。何故なら、「あなたが決闘好きに自殺させられるにしても、それは何が証明されるのでしょうか」と言われるからです。しかし、この答えは簡単です。「あなたは最も明白な危険を前にして、その恐怖を乗り越えることが出来たし、既にその時は全てあなたの意志次第であったことを、それは証明するでしょう」。

女性の名誉はもっと良く隠されている様に見えます。しかしながら、もしも女性が意志に反して最も動物的衝動に屈するなら、名誉が無くなるのは明白です。反対に何らかの寛大な感情に譲歩していると思われている限りでも、名誉は除かれていると判断されます。少なくとも寛大な感情は、それ自体が自発的であると言われるのを私は望みます。それは先ず勇気とか誇りとか自尊心とか、人が求める様なものの不足が齎す間違いと、行き過ぎた勇気が齎す間違いとの間にある大きな対照に気付く様に見分けることに帰するのです。しかし、それらの判断の実際の微妙な差異をもっと細かく調べなければなりません。例えば、女性に対してもっと下劣であるかどうか、あるいは必要な場合はお金に屈するとか、官能の陶酔に屈することに対してももっと下劣であるかどうか究明することです。それらの実例を全て分析することは非常に困難であり、その他にも詳細な概念を想定しています。しかし既に女性の名誉は、多くが男性の名誉に似ているのは明らかです。お金への誘惑や、恐怖とか渇望の様に動物的活動の全てに対して望むことが出来るのを、それだけで分かる行動によって証明することが常に重要です。例えば男性は意見を変えませんから、名誉を傷付けられることがありません。勿論、その変化がお金への欲求や女性の魅力によって起こることを証明され得る限りは意見を変えないのです。それでも自由で率直な女性自身の強さを、浮気したり完全に身を売る女性の強さとは見分けなければなりません。その様に自分自身で思い止まらせる男性は、彼に影響を及ぼしていた多少なりとも下劣な社会でも計算に入れざるを得ない様に見えます。しかし多少なりともお金次第でないとしても、多少なりとも下劣で快楽の過剰に身を委ねていたとするならどうなのでしょうか。人は何時もそれと同じ観念を思い出します。そして同様に人間は結局のところ自分自身のことしか判断しない観念を思い出します。外観だけの判断が、もしも隠された動機を間違えるとしても、少なくともそれらの原理を間違えないことには変わりないのです。少なくとも物理的取扱いに男性が譲歩すると信じられている限り、女性によって最も破廉恥な裏切りに導かれる男性は名誉を傷付けられます。しかし、もしも男性が熱愛する女性の優れた才能に心から感嘆して行動することが明白であったなら、この場合に名誉は決して傷付きません。そしてこの種の弱さは容易に許されます。（完）

（１）レグルス（？～前二五〇頃）は、古代ローマの将軍・政治家で、第一次ポエニ戦争で武功を立てたが、後にカルタゴ軍の捕虜になった。

（２）テュレンヌ（一六一一～七五）は、フランスの元帥で、三十年戦争（一六一八～四八、フランス参戦は一六三五～）で神聖ローマ軍をフロンドの乱でコンデ公を破った。名将・戦略家で名高い。

第十九章　悪 徳

悪徳は恐らく私の主題です。何故なら心の冒険が何時も善に振り向いているとは決して言われないからです。大胆な振舞いによって情熱に協力する者は高貴でもありますが、戻る場所を知りません。私は今、悪徳の中で名誉をものともしない一種の挑発に注意したいと思います。そして私は、陶酔、遊蕩、残忍という三つの悪徳を考えます。これらの悪徳は、私が名付けた三つの情熱に応えていると私は理解しません。兎に角、遊蕩が愛の破局であるのは事実ですし、残忍が恐らく野心の破局であるのも事実です。陶酔に関しては、アルコールが最も有名ですが、色々な麻薬的なものから生じていると私は理解しています。そして陶酔による影響は感情の細心さを失うこととなります。その機能を見越して演じる軽さや軽薄さを学習して陶酔に向かいます。その時に偉大さが無くもありません。でも、それが吝嗇とか慎重への改宗とは反対のものであるのは確かです。しかしもっと適切に言うなら、偉大さに疲れた時には人間の任務を放棄することになります。陶酔はそれ故に、恐らく情熱が約束しているものへの余りに鋭い見方によって、あらゆる感情と反対に向かって行くに違いありません。遊蕩と残忍も陶酔の一種であるのは本当です。何故なら望む術を知らない過剰に悩むからですが、熱心な身振りによって欲情をそそるかも知れずに悩むからです。怒りも陶酔として理解することが出来ます。その意味では一つの見かけによって、そこに身を投じることが人は気に入りますが、その見かけを乗り越えることも良く考えます。怒りから残忍へ行くことは確かにありますが、断言するまでもなく事実であると言える程、そんなにも容易ではありません。あらゆる悪徳の中に私が何らかの熱狂的な意志を見出しているのをお気付きのことと思いますが、それは単に肉体的なことばかりではありません。そして、ここで決定的な或る構造を私が信じるようになることは、全ての悪徳とそれらの最も破廉恥な過剰さは一人ひとりの手の届く処にあると私が納得させられていることです。古代メキシコの過剰さには、お分かりの様にたった一つの祭で一万人の捕虜の首が斬られることがありましたが、民衆や大人たちにやって来るこれらの拷問の光景がそれ程にも無縁な訳ではないのです。残酷さが人間を試すのは決して止まることがありません。そして、それは自分の力を試す一つの方法になるでしょうし、如何にして自然がその意志に応えるのかが分かる一つの方法にもなるでしょう。これらの光景に立ち向かう力と、その苦悩に勇敢に立ち向かう力との間には、確かに類似するものがあります。そこから接近する手段を見出す陶酔によって、戦争は恐るべきものになります。そしてそれは既に、異常な熱狂の原因を説明する一種の恐れとの戦いです。この点から言うと同情も恐るべきものです。

陶酔と残忍はそれ故に冒瀆であり、その中で最も大きな犯罪を犯そうとします。遊蕩もやはりそれと同じなのは明白です。何故なら遊蕩も名誉を傷付けたり、自らの名誉を失ったりして酔っているからです。ここでは既に一種の熱狂が誘惑することによって、その性質は意志に応えます。意志が引きずり込むからです。そしてこの道は常に同意と最も高い喜びを求める愛への情熱のものではありません。それは細かく考察することです。私は恥ずべき病気でしかない悪徳の愚か

なイマージュを、少なくとも払拭したかったのです。その時にはそれらの悪徳は行き過ぎた自惚れにある、と公に喝采して私は言いたいと思います。酒飲みの反逆者たち、酔っ払い、そしてバッカス神でさえも十分にこれらの人間の活動を説明していますが、それらの者たちのいずれに対しても偽善が時々は尊敬に値しているのです。（完）

第二十章　賭けの情熱

賭けの情熱が、情熱の一つかどうか私には分かりません。それは一般的には強いものであることを少なくとも私は知っています。どんなに小さな地方にも賭けの仲間がいて、そこに這入り込むのは簡単です。そこでの最大の自堕落は破産することです。私も学校の仲間たちから賭けに誘われました。そして直ぐに賭けをする人を観察出来る機会を持ちました。或る人は全てを賭けて失う危険を負うことや、決して止められなくなるのを知っても、彼は何よりも先ず心を乱したくないのです。まさに彼は飛び込むことを覚えます。賭けをする人は自分自身の賭けを計算したくないのです。例えば賭けの記録を控えることです。賭けをする人は統一理論を望みません。彼のやり方は大胆に決断することです。何も立ち直るものが決して無いのです。賭けをする人は自分の椅子の上で完全に幸せになっています。彼は不安を愛します。そして不安を覚えることから身を守ります。

私は体験により、賭けはその人間全体を直ぐに捕らえることを知りました。しかし私はもっと正確に見ました。或る友人が或る日、私たちを見に来ました。彼は席に着き、極めて当然のこととして十フランばかりを賭けました。結果は次のとおりです。二日後に彼は、現金全額と会長をしていた団体の基金の全額を失いました。彼は笑われるだけでしたが、彼自身のことを非常に驚いていました。私はこの不合理について冷静に考えなければなりませんでした。賭けの経験は通常の経験と逆であると理解しました。通常は自分が危険な目に遭っていると質問しますが、何も答えが出ません。賭けにおいては答えが直ぐに出ます。人生においては、一つの不幸は他の幾つもの不幸を引き起こします。賭けにおいては、一回の賭けは前回とは全然関係が無いのです。単純に回避すれば、賭けから退去出来ます。人生からは退去することが出来ません。でも、人生に吹き飛ばされて賭けに身を投じます。賭けが退屈を防いでいることは別にしてもです。キプリングの本の中でマクシムス皇帝（1）は危険を伴う何かを始めているのを認めながら、いい加減に言っています、「常に財産や生命を晒さなければならないが、結局はそんな風に何か些細なものなのだ」。この大変な事例は想像上のことですが、私の友人の事例同様に私の眼鏡には役に立つものでした。そして、そのことを考えましょう。賭けにおいての大当たりはまさに巨大であり、常に簡単に可能ですが、それは精神にとっても大変明白な方法によるものです。エースが出れば十分でした。ところがトランプを手にするには、他のものを手にするよりも最早難しくありません。でも、自然はそんな風に決して答えません。好機の中には何時も曖昧さがあります。好機という観念でさえも賭けによって除去されます。全てが一瞬で変わるかもしれないのです。株式市場へ投資することには理性があります。勿論、それにはトランプやルーレットの様に酔わせるものはありません。株式市場には確実らしいものがありますが、クリスタルガラスの様に透明には見えません。そこに見出すのはそれ故に新しい敵です。素っ裸の勇気です。熟練さは何も生みません。英知もそこでは滑稽なものです。或る優れた数学者は、無邪気な若者が黒に賭けるために赤が八回出るのを待っていたのを大変に馬鹿にしていたことを私に語りました。「確率はまさに

至る所にある。九回目に黒が出る確率は、八回目に黒が出るのと一回目に赤が出るのと同じである」。そしてその上で、次の賭けは全然前回の影響を受けないと繰返して言いましょう。以上は、私が賭けから学んだことです。私も良く賭けましたが、賭けの情熱と呼ばれているものは一度も感じたことがなかったと言わねばなりません。（下巻に続く）

（１）マクシムス（三九六頃～四五五）は、西ローマ皇帝（四五五）。ウァレンティアヌス三世を暗殺して即位したが、バンダル族の侵攻により、民衆に暗殺された。

アラン

心 の 冒 険（上）

2017年５月登録

http://p.booklog.jp/book/113506

著 者 : アラン（翻 訳 : 高村 昌憲）
翻訳者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/113506

電子書籍プラットフォーム : パブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社トゥ・ディファクト